
you

一幸

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

you

【Nコード】

N9167F

【作者名】

一幸

【あらすじ】

あずさと美樹は無二の親友だったが、突然、美樹が遠くの町へ引っ越すことに……。あれから6年。高校2年のあずさは地元では有名な不良になり、学校をさぼりバイトに明け暮れていた。そんな日々を送っていたあずさはある日、夢をみた。あずさ自身も忘れていたあの美樹がいたのだ。それから数日後、久し振りに学校に行ってみると、そこには見かけない顔をした女生徒が……。

夢の中に君がいた（前書き）

こんにちは～～！初めて小説を書くので緊張しています・・・。つたない文章ですが大目に見てください。

夢の中に君がいた

プロローグ

「ずっと、友達だからね！さよなら、あずさちゃん！..」

これは・・・小学校のころの？

「これは私の一番大切な宝物のペンダント！絶対になくさないでね。」

・・・きれいなペンダント。

「私たちが大人になったら、また一緒に遊ぼうね！」

うん、絶対、絶対だよ。ペンダント、ずっと大切に持ってるから・・・
大人になったら必ず
会いに行くよ・・・美樹ちゃん・・・。

・・・。。。。。。。。。

「んんん」ムクリ。

（変な夢見たなあ）

河原あずさはゆっくりした動作で起き上がった。
かわはら

（・・・なんで今さらアイツが？もう6年も前のことなのに）

そう思いながら、あずさは時計に目をやった。

「んげ！？もうこんな時間かよ！やっべ〜」

あずさは急いでばさばさ頭を櫛でとかしかなりきつめのメイクをして家を出た。

ブウウウウーーン！！！！

あずさはバイクを飛ばしながら今朝みた夢のことを思い出していた。

（大人になったら、また遊ぼうね！）そのセリフが頭の中にこびりついて離れなかった。

大人なんか

タタタタッ・・・・・・・・（走る音）

ガチャ！（ドアを開ける音）

「すみません！遅れました。」謝りながらファミレスに入ると目が三角にして仁王立ちをしている店長が、あずさを見るなり怒鳴り散らした。

「またか川原！これで4回目だぞ！？言っただ、この前遅刻した時、次遅れてきたらやめてもらうと！」

「すみません！！もう遅刻しないので許して下さい！」

しかし店長は、「いいや駄目だ。そうやって甘やかしたらまた遅刻するにきまつてる！」

あずさも食い下がる、「そこをなんとか！お願いします。」深く頭を下げるが、

「・・・・・・・・。はあ。全く今時の若者は頭を下げればいいときてる、ふん、特にお前のような甘ったれた奴には一度キツイ目にあって世の中がどんなに厳しいかわからせたほうがいいんだ！」

・・・・・・・・。

（私が・・・甘ったれてるだって？お前のような奴？）

ブツン。

あずさは顔を上げジロツと店長を睨んだ。

「な、なんだその目は？」

「偉いのかよ・・・。」

「はっ？」

「お前らみたいな大人がそんなに偉いのかって聞いてんだよ!!」

ドカンツツ!! あずさは近くにあった椅子を蹴りあげた。ついにキレてしまった。

「なっなにを!!？」

「さつきから黙っていれば・・・じゃあアンタは私に文句が言えるほど偉いのかよ！」

はっ！アンタたち大人は都合が悪けりや嘘ついて、危なくなったら自分一人だけ逃げて

・・・アンタ、私がどんな気持ちで生きてきたかわかる!？・・・私は・・・私は甘ったれなんかじゃない!!！」

「お、お前誰に向ってそんな口を・・・」

「うるせえ!こんな店、こっちから出てってやる!!」

タタタッ！

ガチャッ！・・・バン！！！！

・・・数十分後。あずさの家にて。

あずさは後悔していた。「はあ、やつちゃった・・・あそこ自給高かったのに」

（これから、どうしよう。またバイト探さなくちゃいけないのか？）

ゴロンと横になって考えていると、また今朝みた夢の美樹のセリフが頭に浮かんだ。

（大人になったら、また遊ぼうね）

・・・。。。

（ああ、夢のことなんか思い出してる場合じゃないのに！）

あずさはまぶたを閉じて考えたがいつのまにか眠ってしまった。

大人なんか（後書き）

うーん、なんかしっくりこないなあ。次はもっと頑張ります!!

主人公紹介

あ、どうも作者の一幸です！今からあずさについて過去やプロフィールを紹介したいと思います（本当は本編で書くつもりだったんですけど、内容が複雑だと思い、ここにまとめて書くことに）

これから登場するキャラクターは本編が進んでから説明します。

プロフィール

川原 あずさ（１７）

S校に通う女子高生。容姿はそこそこかわいいが、いつもきつめのメイクをして目つきが悪く、彼女自身の性格（一匹狼で、無愛想。こんな性格になっちゃったのには過去に理由が・・・）もあってか友達は一人もない。学校も真面目に通わず、バイトばかりしている。大人が大っきらいで憎んでいる。この理由も過去で明らかに。

過去

小さい頃に父は他界していて、母と二人暮らしだったが、母は若い男と付き合いあずさはほったらかしにされた。（まあ、・・・ベタですな。あはは）やはり小さい頃から友達がおらず、いじめに遭ってしまう。家にも学校にも居場所がない。途方に暮れているあずさを救ったのは、小3の時に転入してきた美樹だった。美樹はあずさとは対照的に活発的でみんなの人気者だった。ある日学校で一人で読書をしているあずさに話しかけたのが美樹だった。それから二人は少しずつ仲良くなっていったのだが、小5の時に美樹が遠くの町へ引っ越してしまう・・・。

これが大体のあずさの過去です。重要な部分は抜いてあってそれはまた後のど・・・。

作者は学校もあって更新が遅れ気味になるかもしれませんが、がんばって連載していきたいと思えます。では～～～。

転校生（前書き）

更新遅れてすいません!!

転校生

モソモソ。

.....。

モソモソモソモソ。

「うう、あ、朝？ね、寝ちゃったんだ・・・あたし」

午前10時。本当なら今頃バイトに行っている時間だが・・・。

（・・・早く見つけられないとなあ。あんな少ない仕送りじゃあやっていけないし）

あずさはアパートに一人暮らしで母は若い男と再婚してしまった。居場所が完全になくなったと感じたあずさは、中学を卒業すると同時に家を出ることにした。母は最初はとまどった様子だったが、あずさが出ていくことを認めたようだった。あずさから言ったわけではないが出ていく時に母は毎月仕送りをするといった。母の言った通りに金が来たが生活して行くにはすこし足りなかったので、ほぼ毎日バイトをしていた。

（あ、っていつか今日学校じゃん・・・最悪）

ガサゴソガサゴソ。

身支度を整えて部屋を出ていこうとした、その時だった。

（さて行くか、って、ん？）

部屋の隅っこに何か光っているものが見えた。あずさはそれを拾って見てみると。

（こ、これ夢でみたペンダント！！どうして、こんな所に？）

手で広げて見てみるとハートの形をしたガラス玉が一つ付いているだけだったが、

控え目ながらもキラキラと輝いていた。

（ちょっと付けてみようかな）

あずさはペンダントを首につけ、鏡でチェックした。

（あたしはハートってがらじゃないけど・・・まあいいか）

今日一日ぐらいとお守りとして身に着け家を出た。

学校にて。キーンコーン、カーンコーン。

廊下には何人も一般生徒がいたが、あずさを見ると目をそらしてその場を離れてしまった。

「……。」あずさは全く気にも止めず、自分のクラスのドアを開けた。

ガラガラガラ。シーン。……ガヤガヤガヤ。

クラスメイトはあずさを一斉に見て一瞬静まったが、また騒ぎだし、中にはこんな会話が混じっていた。

「うわ……来たよ川原が」

「ああ、もうマジで来なくていいんだけど」

「ねえ、早くあいつ辞めないの？学校」

あずさは窓際の一番端っこの席に、だらんと腰をかけた。

（はぁ……文句があるなら直接言えっつの）

あずさもいい加減クラスメイトの反応に腹が立っていた。あずさはクラスメイトの一人ずつに睨みをきかせた。そうすれば大概、相手は目をそらす。

（ふん、このビビりめ）しかし、その中であずさに睨まれても目をそらさないクラスメイトがいた。

（・・・えっ？こいつ・・・誰？）それは・・・全く見知らぬ顔だった。

その子は女生徒で長くて黒い髪、ぱっちりとした大きな目で、「清纯」という言葉が似合う、美少女だった。

（転入生・・・だね。まああたしには関係ないけど）

あずさは目をそらそうとした瞬間、その女生徒は・・・。

ニコツ。満面の笑顔であずさにほほ笑んだ。とても優しい笑顔だった。

（！？なんで、笑ってくるの？こいつ何？）あずさは戸惑った。

誰かにほほ笑んでもらうのなんて何年振りだろう。気がついたら女生徒は前を向いて、もう友達ができたのか楽しく他のクラスメイトとお喋りを始めた。

（何だったんだろう？馬鹿にした笑いじゃなかった・・・よね）

あずさは頬杖をついて考え込んだ。

転校生（後書き）

そういえば、この前応援メールが一通届いていて、すっごく嬉しかったです。これからも応援よろしくおねがいます！！

美樹？

キンコーン、カーンコーン。

4時間目の始まりのチャイムがなった。それと同時に、

ガラガラガラ。数学の先生が入ってきた。名前は戸山^{とやまこうた}浩太。

「うしっ！おい、お前ら！座れ！はい始めるぞー！！」

ガタガタ。クラスメイトは面倒臭そうに席に着いた。

「はい！号令！」この先生はいつもへんな気合いが入っていて、先生自身「私は至って普通」

だと思っているのだろうが、周りからみればかなり変わっている。

「起立！礼！着席！」

「よし、出席をとるぞー！！えー、と」

戸山は教室内を見まわした、あずさと目が合うと、

少し迷惑そうな顔をした。

「・・・えーと、欠席はいないな・・・と。よし授業を始めるぞ！

えー今日は・・・」

（・・・分かってるよ。あたしが来て嫌なんだろう？分かってるよ）

あずさは授業のことなど聞いていなかった、あずさは学校が大嫌いだった。

先生も、クラスメイトも、みんな嫌だった。しかし高校にいつて卒業しないとまともな職に就けないのを知っているので行くしかなかった。

（もう嫌だ、帰りたい）

あずさは机に突っ伏して寝始めた、ペンダントについているハートのガラス玉が物哀しげに輝いていた。

キンコーン、カーンコーン。

4時間目の終わりのチャイムだ、戸山は、

「ちょうど区切りの良い所で終わったな、よし！休み時間にしていぞ」

そう言うときと教室を出て行った、行ったと同時にクラスメイトは席を立てざわつき始めた。女子は例の女生徒の所へ駆け寄っ

た。すると・・・

「ねえ美樹ちゃん！この後、一緒に御飯食べようよ」

「そうそう！ついでに学校を案内するから」

・・・・・・・・・・・・・・・・へっ？

「み、美樹い！！？」ガタガタ！あずさは勢い良く立った。

シーン。教室内は静寂に包まれた・・・。

（あっ・・・しまった）ガタガタ。あずさは俯いて静かに座った。

シーン、ザワザワザワザワ！

「ええ！？何いものの、マジびっくりしたんだけど」

「も、もしかして知り合いなの？」

クラスメイトの会話が聞こえて、あずさはますます恥ずかしくなり、

（うつ、最悪。目立たないようにしてたのに）

赤くなった顔を見られないように、やはり机に突っ伏した。あずさは突っ伏しながら冷静に考え始めた。

（美樹・・・、美樹って言ったよね。う、嘘）

そこで、教室に戸山が入ってきた。

「お、おい大山！ちよつとこつちに来なさい！」

「はい」返事をしたのは、転校生、美樹だった。美樹は戸山の所へ行き、二人はそのまま廊下に消えていった。

（大山って・・・。た、確か5年前に引越した美樹は・・・。
田辺）

・・・。。。

（人違いかよ！）あずさは心の中で突っ込みをかました。

美樹？（後書き）

最後までちゃんと主人公が間抜けっぽいですね、キャラ壊したかな？

大山美樹

学校の屋上にて。

昼休み、あずさは屋上でタバコを吹かしていた。この屋上は元々立ち入り禁止なのだが、鍵が壊れているため誰でも簡単に出入りできた、といっても来るのはほとんど不良ばかりで、今日も何人があずさのようにタバコを吸ったり、ボールで遊んだりしていた。

（はぁ・・・本当に最悪。みんなの前で赤っ恥かっちゃった）

さっきの事を思い出して、また顔を赤らめるあずさ。

（教室戻るの嫌だな、今日はこのまま帰ろう）

そう思っただけで立ち上がった・・・その時だった。

「川原さん！」

「うわ！」いきなり名前を呼ばれてあずさは慌ててタバコを隠す。先生にタバコを見られてしまったら

大変だ、停学は免れない。

あずさが振り返ってみると・・・そこには

大山美樹がいた、よく見ると弁当箱を下げている。

（はぁ、なんだよこいつかよ）あずさは体を向き直して、またタバコを吹かした。

（・・・えっ？こいつ今、私の名前呼んだ？）あずさはもう一度振り返って美樹を見ると。

美樹はあずさと目が合うとにっこりと笑い。

「川原さん！一緒にお弁当食べよ！」

！！予想外の言葉が出てきたので、あずさはさっきタバコを隠す時以上に慌てて、

「ええっ！？いやいやいや！いいよ、遠慮する！！」・・・かなり取り乱している。

美樹は大きな目をきょとんとさせて、「えっ？どうして？」と聞き返すと。

「い、いやだつてさ！あ、あたしと食べたっておもしろくないし・・・他にいるでしょ！？」

確かに美樹にはすでに親しい友人が何人かいた。すると美樹は・・・

「でも・・・私は川原さんと食べたいの!」

「ええええっ!?!」(こ、こんなこと・・・初めてだ)

「一緒に食べちゃだめなの?」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・」

「いいの?」

「う、うん」結局返事をしてしまった。

「やったー!ー!ー!じゃあ食べよ食べよ!」と言って、ぴよんとあずさの横に座り弁当を広げて「いっただっきまーす!」とおいしそうに食べ始めた。

そんな美樹の様子を横から見たあずさは、

(へ、変なことになっちゃったなあ)と内心困っていたが、

(まあ変なやつだけど・・・一緒にいて、悪い気はしないな。って
いうか・・・なんか懐かしい)あずさは引越した美樹のことを思い出した。

そういえば・・・昔は毎日こうやってあいつと肩ならべて弁当食べてたっけ。

「はい、あずさちゃん。あーん」おいしそうな卵焼きが目の前にある、美樹の手作りだ。

「いいよ、美樹ちゃん食べなよ」あずさは恥ずかしがって拒むが、

「いいからいいから！はい！あーん！」

あずさもついに根負けして、

「あ、あーん」パクツ・・・モグモグ。

「お、おいしい」

「本当！？よかったあ」美樹はとてもうれしそうだった。

美樹は・・・あたしの大切な友達だった。あたしの全てだった。・・・しかし、彼女がいなくなってから、あたしはカラッポになった。美樹がいたから、あたしがいた。・・・美樹。

もう一度、会いたいな。

「んっ？誰に会いたいの？」美樹はまたきょとした目であずさをみた。

「えっ・・・いい、いや別に」いつのまにか声に出していたようだ。

美樹は「ふーん」と言って、また弁当を食べ始めた。

(・・・) あずさは、そつと美樹を見て、小さい頃、親しかった美樹を照らし合わせた。

大山美樹（後書き）

作者は風邪をひいて更新が遅れました、すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9167f/>

you

2010年12月1日06時32分発行